

市民と市長との対話集会会議録【要旨】

※生成 AI による要約を行なっています。

令和 7 年 4 月 28 日 中津川市の医療を考える会

会長

時間になったので始める。本日は市長に 2 点質問がある。坂下診療所の民営化について 40 分、市民病院の医療の質向上について 20 分の時間配分で進める。

市長

市長就任から 1 年 3 カ月経過し、対話集会を 35 回実施した。中津川市は広く、さまざまな団体と対話を重ねている。一方通行の要望聴取ではなく、対話を通じて課題解決を目指している。限られた時間だが有意義な時間にしたい。

会長

病院局との面談で坂下診療所の民営化について「賛成でも反対でもない」という公式見解を聞いた。純正会は昨年 7 月に 1 年待ってほしいと言い、その期限が迫っている。この姿勢はいつ変わるのか。

市長

坂下診療所に関する方向性は変わっていない。中津川市全体で市民がより良い医療を受けられる体制構築が目標である。坂下診療所は何らかの形で残す方向で検討中だが、まだ結論は出ていない。医師会、純正会、岐阜県を含めた関係者と協議を継続している。市の考えだけですべてが決まるわけではない厳しい現実がある。

会長

市民の署名 1 万 7400 筆を集めたが、6 月議会までさらに署名を集める予定である。医師会との面談では、医師会長が「一度も面談していない人にいいとか悪いとか言えない」と述べた。純正会とは三度会ったが理事長とは会っていない。4 月に理事長が代替わりした。トップ同士や責任者が会うことが重要であり、方向性が決まっていなくても人と人が会うことが大切である。立ち会ってほしい。

市長

そうしたアプローチもあり得るが、タイミングが重要である。医師会長からそのような要望は受けていないが、もし要望があれば間を取り持つことはやぶさかではない。

参加者

坂下診療所の医師について質問する。院長や先生にはご高齢の方もみえ体調不良もある。医師の問題は重要であり、現状と対策についての考えを聞きたい。

市長

長年診療所を支えてくれた医師に感謝している。市内全体で医師・看護師不足の問題がある。医師確保の難しさを実感しており、特に坂下診療所については厳しい状況である。大学病院へ依頼するなど努力しているが、形になっていない。市民病院から坂下診療所への医師異動も簡単ではない。

市民からの協力や情報提供もあれば助かる。

参加者

高校の同窓会ネットワークを活用するのも良いのではないか。

市長

自分はそれを活用している。

参加者

坂下病院が縮小されたとき、医師が「私はどこへも行きません」と張り紙をしていたが、いつの間にかいなくなった。医師も住民を考えてくれていた。坂下病院がなくなってから町はガラガラになり、閑散としている。坂下病院を守る会を結成し、署名活動、知事選挙候補者への働きかけ、県庁・厚労省への訴え、国会委員会での発言などさまざまな活動をした。純正会が唯一手を挙げてくれ、地域医療の詳細な計画を示してくれたことで住民は喜んだ。7月開業に向けて進む予定だったが、市長選後に状況が変わった。議会での質問後、坂下で報告会を開催したところ 200 人以上が集まった。なぜ話し合いが頓挫しているのか、なぜ一旦進んでいた話が進まないのかを知りたい。署名には住民の切実な思いが込められている。

市長

純正会がプロポーザルに手を挙げたが、それだけでは決定ではない。その後の協議が始まったものである。頓挫しているのではなく、思うように進んでいないのが現状である。坂下の医療機関をなくそうとしているわけではなく、維持するために話し合いを続けている。県の医療構想会議では病床数は足りているという判断があり、病床数を増やすことへの理解を得るのが難しい状況である。

参加者

医師会との話は進んでいるのか。

市長

医師会とは話をしている。

参加者

最近の話し合いはいつ頃か。

市長

定期的に会っており、半年以上会っていないということはない。

参加者

なぜ進まないのか理由は把握しているのか。

市長

進まない理由はいくつかある。純正会の要望に答えられていない点、坂下診療所の設備が大きく維持が難しい点、患者が集まりにくい立地、医師・看護師確保の問題などがある。病院から診療所になった背景には経営の問題もある。

参加者

一番の理由は医師不足と言われていた。

市長

それも一因である。

会長

全国公募で医師を集められなかったのか疑問が残る。医師確保が最重要課題である。

参加者

「中津川市民のよりよい医療を受けられる体制作り」という市長の考えに賛同する。坂下診療所に病院機能が戻ることは重要であり、民間移譲により市の財政負担も軽減できる。市民病院は待ち時間が長く、救急でも他院に転送されることが多い。市民病院は急性期病院として機能向上を、回復期・療養は純正会や城山病院で担うという役割分担が効果的と考える。先ほど、「私の意向がすべて通るわけではない」という発言があったが、その意向を聞きたい。

市長

市民病院は中津川市と近隣自治体にとって不可欠な基幹病院である。急性期病院としての充実が市民の医療体制確保につながる。病床数と医師確保には関連があり、ある程度の規模が必要である。また診療科の充実も研修医確保に重要である。市民病院は老朽化しており、将来的に建て替えが必要となる。人口10万人に1つの病院という考え方があり、瑞浪と土岐の統合のような広域的な病院構築も視野に入れる必要がある。

参加者

市のアンケートでは地域医療の充実が最も求められている項目だった。市民病院の対応に問題があり、夜間に帰宅させられる患者の話も多く聞く。市長公約の「心の安心づくり」にある「地元医師会との連携強化、坂下診療所の課題解決」は具体的にどう進んでいるのか。医師会長は「公設民営なら容認するが病床増には反対」と述べており、これが協議停滞の原因ではないか。また市の組織改革で病院事業部が医療福祉部と病院局に分かれたことが民営化に影響しているのではないか。

市長

公約の「医師会との連携強化」は坂下診療所だけでなく市全体の医療に関わる重要事項である。医師会には病院医師も開業医も所属しており、開業医なしには市の医療は成り立たない。純正会との

交渉では、純正会には要望があるが応えられていない状況である。病床数の問題が大きく、県の判断では病床数は足りているため増床は難しい。組織改革については、以前は医療関連部署が分散していたが、医療は統合的に扱うべきとの考えから医療福祉部の中に病院局を置いた。これにより中津川市の医療体制はわかりやすくなった。

会長

61歳女性が脳梗塞で職場で倒れ、市民病院に常勤医がいないため他市の総合病院に搬送中に亡くなった事例がある。脳梗塞患者が増えているが対応できていない。署名活動中に退職した脳神経内科看護師から「医師の定着率が低い」という話を聞いた。また、看護師の負担も大きいという声もある。

参加者

5年前に母が脳梗塞で倒れた際、市民病院も近隣病院も受け入れできず、2時間後に他市の総合病院に搬送されたが、時間経過で症状が悪化し半身麻痺と言語障害が残った。コロナ禍で面会もできず亡くなった。子どもたちも「中津川は医療体制が不安で帰れない」と言う。署名に込められた思いを汲み取り、早急に改善してほしい。

参加者

レベルの高い病院を望む。恵北地区から市民病院まで30～40分かかるが、坂下病院なら付知から20分で到着する。坂下病院の充実が重要である。開業医からの紹介状でも受診拒否されることがあり問題だ。

参加者

市民病院を含め医療環境の改善を望む。協力できることは協力したい。

市長

自分の両親も脳梗塞を経験したが、その場合については専門医のいる他市の総合病院への搬送は適切だったと考えている。理想は24時間全科対応だが現実的に難しい。病院間の連携強化が必要である。中津川市民病院には良い対応事例も多く、批判だけでなく良い点も評価することで職員のモチベーション向上につながる。悪い点は指摘して改善を促すことが大切である。

参加者

坂下病院は民営化の方向で検討しているのか確認したい。

市長

民営化を含め何らかの形で残していく方針である。具体的方法は検討中だが、課題解決は容易ではない。

参加者

情報を共有しながら一緒に考えていくことはできないか。全貌が見えない状況だ。

市長

公表できない情報も多い。

会長

時間になったので終了する。長時間ありがとうございました。